

福沢諭吉のアジア認識

－『脱亜論』を中心に－

李爽蓉*

lishuangrong2018@163.com

曹永湖**

yhcho@deu.ac.kr

＜目次＞

- | | |
|--------------|-------------|
| 1. はじめに | 4. 「脱亜」を唱える |
| 2. 先行研究と研究課題 | 5. おわりに |
| 3. 「脱亜」の背景 | |

主題語: 脱亜論(Leaving Asia)、福沢諭吉(Fukuzawa Yukichi)、明治維新(Meiji Restoration)、清国亡国論(the fall of the Qing Dynasty)、輔車唇齒否定論(denial of dependence simultaneously)、隣国に蔽われる危憂論(danger triggered by the backwardness of neighboring countries)、割亜論(Dividing Asia)

1. はじめに

『脱亜論』とは、日刊紙「時事新報」紙上に明治十八年(1885年)三月十六日に福沢諭吉が発表した社説を指す。昭和八年(1933年)に慶応義塾編「続福沢全集<第2巻>」(岩波書店)に収録された。「時事新報」は明治十五年(1882年)に福沢によって創刊された日刊紙であって、当然彼の強い影響の下にあった。

このアジア蔑視に満ちた『脱亜論』の執筆者が、他ではなく、「近代日本の偉大な思想啓蒙家・教育家」福沢諭吉であることに対し様々な疑問が心中に湧き出した。一体、『脱亜論』は「近代日本最大の啓蒙思想家」である福沢諭吉がどのような背景において書いたものか、福沢諭吉のアジア認識はどのような形で展開してきたのか、時代をさかのぼって考えることにしたい。

* 東義大学校 大学院 日語日文学科 博士課程

** 東義大学校 人文科学大学 日本語学科 教授

2. 先行研究と研究課題

福沢諭吉の研究は、史料的には極めて恵まれた条件の下にある。全集は、明治三十一(1898)年に時事新報社編の五巻本が出て以来、大正十四(1925)～十五年には、同じ編の十巻の全集、昭和八(1933)～九年に、慶応義塾編の続全集七巻が出、さらに昭和三十三(1958)～三十九年には、現存史料のほとんどを網羅した慶応義塾編の二十一巻全集が発行されている。福沢の膨大な著作の中、彼が自己の思想を体系的に著述したものは『文明論之概略』ただ一つといっても良く、主要部分は、時事問題を扱っての発言である。したがって、本論文では、その当時の政治状況・思想状況、それに対する彼の姿勢と関心の所在について考察してみたい。さらに、その時々の違いにも関わらず、彼の主張の一貫したものについて探究してみたい。

今まで先学たちの業績は、遠山茂樹氏によると、大まかに言えば、二つに類別することができる。一類は、政治・経済・社会の各領域の具体的問題にたいする態度と批判の方向を基礎づける思惟方法と価値意識に、福沢の思想の特色を求めようとする視点である。代表的なのは、田中王堂氏の論(『福沢諭吉』大正四年)と、その上にいつそう発展させた形となっているのが丸山真男氏の論である(「福沢に於ける『実学』の転回」『東洋文化研究』第三号 昭和二十二年、「福沢の哲学—とくにその時事批判との関連—」『国家学会雑誌』六十一巻昭和二十六年)。

もう一類は、主としてイデオロギーとしての側面から考察したものである。すなわち福沢がいかなる社会的政治的立場に立ち、どのような姿勢から、いかなる内容の発言をしたか、それは歴史の発展の中でどのような役割をもったかという観点に立つものである。この視点は、本論文の立場に近いので、もう少し詳しく紹介したいと思う。まず羽仁五郎氏は「この人民の運動の成長の実力が下から押し来って居たからこそ、あの福沢諭吉の封建主義に対する不満及び批判及び洋学に依る文明の業の進歩の要求は、今は単なる不満に終らしめられてしまうことも挫折せしめられてしまうこともなきを得て、幾多の先覚等が挫折したところをも進み越えて、ここに俄然としての最早如何とも動かすべからざる原則に到達し揺がすべからざる組織的体系を形成し、せき止めることのできない奔流を現出するに及んだのであった」「かの封建支配の偏重抑圧に対する福沢諭吉の人民文明の進歩の努力が漸く有産者市民文明の偏重となり且つそこに人民に対して旧封建的勢力の残存にこの新有

1) 遠山茂樹(1970)「考察の視点」『福沢諭吉—思想と政治との関連—』東京大学出版会

産者的要素が妥協共同するの傾向に導かれ、彼の本来の主張に矛盾するに至って来たことは、彼の人民の観念乃至社会の観念の内容の不明確が主観的客観的の歴史的條件の展開の間にそうした新しい偏重に従うに至ったのであった」と論じた²⁾。羽仁氏に言わせれば、福沢がいかなる位置を占めたかに着眼し、体系有り原則ある独自の思想を展開しえた理由を、彼がいかなる問題にも自主自由の原則を持し、人民の立場に立ちえた点にその根拠を求め、しかも彼が士族の立場を脱しきれず、人民の立場に徹しえなかったことに、反封建の主張が挫折歪曲せしめられた所以があるのであるとする。

家永三郎氏も、福沢の畢生の事業が「封建的なもの」と戦って、日本を「近代化」することにあつたが、彼の目標とする近代化とは、資本家の指導する日本を築きあげることであったとし、その資本家支持、貧富平均論排斥の意図を指摘し、決して無限界の自由平等の社会を樹立しようとするのではなかったと論じた³⁾。

服部之総氏の福沢論(『福沢諭吉』『服部之総著作集』第六卷)は、前の論者たちと著しく異なる。服部氏が「福沢研究のかんどころは、主体的に云ってみて、福沢惚れによって福沢の真実にはとうてい到達できないということである」と説いた。また、福沢を含めた明六社の同人の売物とする泰西文明思想は「ヨーロッパでは絶対主義にたいする抗争の武器として生まれ、日本では絶対主義権力の補強の武器とな」ったと指摘した。さらに「わたくしが確信することは、福沢諭吉の節操と人格は、彼の思想体系と全行動がけっして民主主義ではなく、けっして十八世紀のイギリス人そっくりでなく、いわんや純粋な英米流の新興資本主義イデオロギーでも、典型的市民的自由主義でもなく、ただ終始一貫して絶対主義に属していたという観点のみが、よく論証に耐えうるということである」と結論した。

安川寿之輔氏は思想家としての福沢諭吉の全体像を、後進国日本のブルジョアイデオログと評価し、政治的役割においては、基本的に明治絶対主義政府の「開明派」を支持する立場にあったと見て、福沢の思想の生涯に基本的な変化があったとは把握しない。変化したのは、あくまで福沢をとりまく明治日本の政治的・経済的・社会的環境であり、この社会状況によって、福沢のはたす政治的・社会的役割は当然変化するが、福沢の思想そのものは不変であったと主張した。

『福沢諭吉選集』第六卷に石田雄氏の解説が書く。「福沢の政治論に関する評価は、時代により人により極端な多様性を示している。一方の極には民主主義あるいは自由主義の使徒としての福沢像があり、他方の極には絶対主義思想家という「本質規定」がある。その中間

2) 羽仁五郎(昭和27年)『白石・諭吉』、pp.271-376

3) 家永三郎(昭和25年)『福沢諭吉の階級意識』『近代精神とその限界』

ともいうべき位置に、プラグマティスト、啓蒙専制主義者としての福沢諭吉もある。さらに福沢の生涯をめぐって、いつからどのように変ったかという点に関しても、諸説が分かれている。福沢論の変遷と多様性は、それ自身思想史的に、あるいは知識社会学的に興味ある主題である」と。

しかし、「時事新報」における発表されたアジア関係の社説を通じて福沢諭吉のアジア認識は十分に検討されず、『脱亜論』に現われたアジア蔑視論については理論的に分析した研究もまだない。本稿では、現在アメリカをはじめとする民族主義と保護主義の台頭を念頭に、新たな時代におけるアジア関係、特に日本の対アジア歴史認識へ示唆を与えることを目的として福沢諭吉のアジア認識を考察する。分析に当たって、まず『脱亜論』を中心に、当時の「脱亜」の背景を明白にする、次に、時事新報社説に於ける1885年前後発表された一連のアジア論に基づき、福沢諭吉の考え方には一貫するものを持っていたと検証したい。最後に、福沢諭吉のアジア論を整理してまとめてみると共にそれが一般国民の歴史認識への影響を論述したいと思う。

3. 「脱亜」の背景

米国の砲艦が1853年に日本に侵入して、日本は「日米和親条約」という不平等条約を強制的に締結せざるをえなくなった。こののち日本は、英国・ロシア・フランスなどとも続けて同様の条約を結ばせられた。そして強制的に「開国」させられたあとの日本では、有識者が西洋強国の技術に学んで自強と自存を図るべし、という主張が行われる。この状況は同時期の中国と非常に似ている。そして、1868年の明治維新はこのような背景において起きた。

明治維新にいて中国では上から行われたブルジョア革命であり、日本が近代資本主義国家への道を歩きはじめる、と認識されるのが普通である。しかし日本においては、日本の資本主義の性格について、20世紀30年代前後に講座派と労農派の間で激しく論戦が交わされた。所謂日本資本主義論争と称する。吉川弘文館発行の『国史大辞典』によると、日本資本主義論争とは、第二次世界大戦前から戦後にかけてマルクス主義理論戦線上で、近代天皇制国家の性格とその階級的基礎、明治維新の歴史的な性格、日本資本主義の構造的性質とその変化などをめぐって、多数の理論家・歴史家が参加して激しく展開された論争である。

特に、日本農業に支配的だった地主制(地主的土地所有-零細小作関係)の性格を半封建制とみるか否かが一中心論点となったため、封建論争とも呼ばれる。結局、近代天皇制国家と日本資本主義の全過程の体系的把握については論議が切り結ばれることなく、論争は次第に消失していったが、日本資本主義の前近代性を主張する講座派の理論が、今日の史学界に大きな影響を与えたことは間違いない。

講座派は、野呂栄太郎「日本資本主義発達史」などにより、資本主義の前近代性を明らかにし、二段階革命論を唱えた。このことは、コミンテルンの27年テーゼ、32年テーゼの位置付けにおいても重要な役割を果たした。野呂は、維新の土地改革(地租改正)は封建的生産物地代を封建的貨幣地代へ転化したにすぎず、その後その下で発展した地主制は、地主が直接生産者たる小作農からその全剰余労働を経済外的強制によって主として生産物形態で搾取する半封建的生産関係であり、地主階級は未だ経済上、政治上の支配的地位を失わない独自の支配勢力であって絶対主義⁴⁾の段階的、物質的基礎は残存していると指摘した。このように、明治維新後の日本を絶対主義国家と規定したのである。論争が本格的に進んでいって、昭和六年九月(1931.9.8.)「満州」侵略戦争の開始により日本の中国軍事侵略が国際的に大きな脅威を与えるとともに、国内的には恐慌が深化する中で労働者農民運動が再び激化するに及んで、国際的革命運動において日本の革命戦略の再検討が緊急の課題として討論され、片山潜・野坂参三など日本共産党幹部も参加したコミンテルン執行委員会で新たに「日本の情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ」(所謂32年テーゼ)が採択された(昭和七年五月公表、七月『赤旗』公表)。それは絶対主義天皇制・地主制・独占資本主義の三者結合した支配体制、その中で天皇制の独自の役割、日本帝国主義の軍事的封建的特質を強調し、二段階革命論を明確にするとともに革命的情勢の切迫を説いたものであった。このように32年テーゼが福沢の没後約30年の切迫した情勢を明言している。

更にヨーロッパ絶対主義における「プロイセン主義」(ゲールハルト・リッターがいう「独裁制への傾向。そして臣下をして厳格な、反抗の許されない服従に慣れさせ、国家に対する自己を捨てた、犠牲的な無言の奉仕に慣れさせること」『プロイセンの構造』坂井栄太郎)は

4) 「絶対君主制、絶対王政ともいう。封建制から資本主義への過渡期に世界的に現れた中央集権の専制国家。神格化された無制限の権力をもつ君主が、強大な官僚機構・常備軍・警察などをもって人民を専制的に支配する。16世紀~18世紀のイギリスのチューダー、スチュアート王朝、フランスのブルボン王朝などを古典的な絶対主義という。それは、各地の農民反乱や資本家階級の形成などによる分権的な領主支配の危機への反応として生まれ、君主への権力集中によって封建的生産関係の再建・維持をはかる一方、重商主義政策によって資本主義も育成したが、ブルジョア革命によって打倒された。ロシアのツァーリズム、戦前の日本の天皇制も絶対主義の一種である。」『社会科学総合辞典』社会科学辞典編集委員会編、新日本出版社(1992年7月15日)

明治維新以降に確立した絶対主義とよく比較される。維新に当って、日本の社会において一般の知識人的武士の神田孝平(明六社の同人)は、1868年の覚書に「日本国当今急務」を次の五点にまとめている。「一、我日本は永久独立国たるべし、決して他国の付属となるべからず。二、我日本独立せんと欲せば、是に相応せる国力を起さざるべからず。三、右国力を起さんと欲せば、日本国中宜しく一致すべし。四、日本国中の一致せんことを欲せば、国人をして悉く政府の政に従はしむべし。五、国人をして政府の政に従はしめんと欲せば、政府にて広く日本国中の説を採るべし。決して一方の説に泥むべからず。」この言葉をフライヘル・フォム・シュタインのナッサウ意見書(1807年)にある次の言葉と比べていただきたい。「公共精神と市民精神意識の振興。眠りこみ、もしくは誤って導かれている民力、また散在している知識の活用。国民の精神、その意見や欲求と、国家官庁のそれとの調和。祖国自主独立、そして国民の誇りに対する感情の蘇生」。当時公共精神と市民精神を欠く明治維新は正に国民の参与なしに上から押し付けられたものである。

ここでは講座派の説に沿って明治維新の性質について説明した。その上で明治時代に活躍していた民間「思想家」として、当時の福沢諭吉が明治政府の下でどのような役目を演じていたのかについて考えてみたい。

明治以降の近代日本の政治・経済・外交における基本的姿勢が、所謂「脱亜」入欧の一边倒であったことは言うまでもない。このような日本人の基本的姿勢を「脱亜」という的確な一語で把握表現し、かつその方向で与論を決定付けるよう宣言したのが、明治十八年の福沢諭吉であった。ある意味で、彼は明治時代の国家政策・戦略の決定者と言ってもよいだろう。また、当時の政府の外交政策に関する民間における代弁者としての役割を見事に果たしたものとさえ言えよう。

福沢はそうした代弁者の役目を本人自ら誇らしく思っていたようである。それを示すのが「福沢全集緒言」の「分権論以下」の項に語られた追憶である。政府の存在する意味は、人民の独立のための人権を保証するものである。「左れば……福沢が却って着実なる人物となって君等(政府側、「君」は大久保利通)の為に却って頼もしく思はるる場合もあるべし幾重にも御安心あれと恰も約束したることあり」。この大久保との「幾重にも御安心あれ」という約束は、彼が民間に存在しながら「却って政府の頼もしい存在であると覚悟し、一生を貫いたものである。

まず明治五年(1872年)―九年に出版された「学問のすすめ」を見てみよう。この著作の目的について、福沢はこう述べている。「人民若し暴政を避けんと欲せば速に学問に志し自ら才徳を高くして政府と相対し同位同等の地位に登らざるべからず是即ち余輩の勸る学問の趣

意なり」(二編)。それ故に国民が良政府を求めるなら、国民自身が賢良な国民にならなければならないということである。更に、「元来人民と政府の間柄はもと同一体にて……政府は人民の名代となりて法を施し人民は必ず此法を守るべしと固く約束したるものなり」、「明治の年号を奉ずる者は今の政府の法に従うべしと条約を結びたる人民なり故に一度び国法と定まりたることは仮令或は人民一個のために不便利あるも其改革まではこれを動かすを得ず小心翼翼謹んで守らざるべからず」(二編)「国民は政府と約束して政令の権柄を政府に任せたるものなれば」(六編)など政府に対する人民の随順を要求した。

そして「学問のすすめ」の中に示した暴政観もかなり露骨である。彼の曰く、「一国の暴政は必しも暴君吏の所為のみに非ず其の実は人民の無知を以て自ら招く謂なり」、「斯る馬鹿者を取扱うにはとても道理を以てすべからず不本意ながら力を以て威し一時の大害を鎮むるより外に方便あることなし是れ即ち世に暴政府のある所以なり」(二編)彼によれば、暴政は人民の無知によって存在し、愚民の上に苛政がある。普通は道理は人民側にあり、政府が人民を暴力によってしいたげる政治を「暴政」と呼ぶのでないか。明らかにこれは明治政府の側に立ち、明治政府のために言ったものである。

ここに至れば、絶対主義天皇制⁵⁾のもとで、民間にいる福沢の「政府代弁者」としての姿が皆の前に現れて来ざるを得ない。

4. 「脱亜」を唱える

“興亜論”に対して、相反する思想を唱えたのは福沢諭吉である。それが“脱亜論”である。福沢の『脱亜論』に関して、簡単に概要をまとめてみた。その際、『脱亜論』の中で、目に付く主張点として、“脱亜論”・それから“清国亡国論”・日、中、朝間の“輔車唇齒否定論”・

5) 「(前略)封建制の解体過程と資本主義のための国内市場の形成過程で、中央集権的単一国家の形成をめぐる階級闘争が行われたが、下からの革命の進展をおそれて、将軍に代わって天皇をかたぎ絶対主義国家をつくらうとする勢力(主として下級武士層)が現れた。公家(くげ)・旧領主・地主・資本家などに利用され、明治維新後、天皇が絶対主義的な専制権力をにぎることとなった。ふつう天皇制という場合には、この近代天皇制をいい、絶対主義的天皇制と呼ばれる。天皇は、唯一最高の権力者とされ神権的な権威をもち、資本家・地主階級のための国家の頂点にたった。この絶対主義的天皇制は、天皇が軍部・官僚をひきい、超階級的な独自の権力としてあらわれると共に、資本家・地主階級の利益を擁護し、労働者・農民をはじめ全人民を専制的に支配する権力の仕組みであった。絶対主義的天皇制は、1889年の大日本帝国憲法で制度的に完成され、アジア侵略を強行する軍国主義・帝国主義の権力となっていった。」『社会科学総合辞典』社会科学辞典編集委員会編、新日本出版社(1992年7月15日)

“隣国に蔽われる危憂論”・“割亜論”という五つが存在しているように思う。その主張点は文中では→〔 〕をもって記した。

文明は麻疹の流行の如し、東に蔓延して、この東漸には、知者はその浸透を助けるべきである。

嘉永の開国を発端として、西洋文明が日本に入ることになった。日本は独立しなければならない。倒幕維新の際、日本国が「まず国を重しとし、政府を軽しとするの大義に基づき、また帝室の神聖・尊厳に依頼して、旧政府を倒し新政府を立て、國中朝野の別なく一切万事西洋近時の文明を採り、独り日本の旧套を脱したるのみならず、アジア全州のなかに新たに一機軸を出し」たことを以て、福沢は直ちにこれを「脱亜」だとし、「主義とするところは、ただ「脱亜」の二字にあるのみ。」とした。ここでいう「脱亜」は最初に江戸末期の開国騒ぎにおいて福沢が目指した方向性を指す。→〔脱亜論〕

続いて中国・朝鮮の国情を述べている。日本の国民の精神はすでにアジアの固陋を脱して、西洋の文明に移ったことに対して、中国と朝鮮の国民は古風・旧慣に恋々する。儒教の学校教育もただ外見の虚飾だけで、実際には残酷で恥を知る心がなく、おごり高ぶり自省の念もない者である。日本が維新を企て行ったように、政治を改め人心を一新しなければ、早晚亡国となり、世界文明諸国の分割に帰すに違いないと判断した。見られるように、福沢は中国と朝鮮の亡国可能性を論じているのである。→〔清国亡国論〕

最後のところに、日本と中国・朝鮮との間においての輔車・唇齒という隣国が互いに助けあうことを否定した(→〔輔車唇齒否定論〕)。欧米人の目で見た時、中国と朝鮮の政府が古風の専制であって、士人が惑溺深く科学の何ものかを知らない、中国人が卑屈で恥を知らない、朝鮮が刑することにおいて惨酷である、等々の醜に隣国の日本も蔽われてしまうようになる。その影響が事実に見れて、間接に我外交の故障となる。(→〔隣国に蔽われる論〕)。そうであれば、むしろ特別の会釈に及ばず、西洋人がこれに接するの風に従って処分すべきのみ。→〔割亜論〕

以上が『脱亜論』の内容であった。この五つの主張点が『脱亜論』以前に既に持論として論じられていたのである。以下で、そのことについて詳しく論述してみようと思う。

まず「脱亜」という語が初めて『時事新報』に現れるのは、明治十七年(1884年)十一月十三日付の『日本は東洋たるべからず』と題する次のような論説であった。

支那も亜細亞洲中の一国なれば必ず一家内の如く其榮辱を共にせざるべからずとの理はなかるべし。もしも他に「オリエンタル」を去て欧州に移転する工夫あれば断じてこれを去るべし……

余は興亜会に反して脱亜会の設立を希望するものなり。

アジア全体を覚醒させ、共同で西洋の侵略に立ち向かうという“興亜論”の構想に、福沢は反対した。むしろ福沢はためらうことなく、日本をして、アジアから脱して西欧の側に走らしめる希望をもっていた。

明治十六年(1883年)六月十三日の『支那人民の前途甚だ多事なり』において、次のような清国亡国論が現れる。

今や支那政府は安南王国の所有権に関して佛政府と葛藤を生じ、將にこれを干戈に訴へんとするの危境に迫りたり。戦はんか、永遠の勝算に乏し。退かんか、国威の日にちぢまるを如何せん。仮令支那政府をして此一戦を賭せしむるも、或は辱を忍て和を講ぜしむるも、支那帝国の全体上には新たに又多少の文明を輸入するの媒介たるべし。人民は駸々として日に益文明を見聞し、政府は惴々として日に益復古退守す。我輩満清政府のために年をトするに、今より以後再び両手の指を屈することを得ば、蓋し望外の僥倖ならんか。

人民が西洋の文明を益々見聞するとともに満清政府の滅ぶ運命を予言した。また『脈既に上れり』(明治十七年(1884年)八月十五日)にも「数年ならずして亡国となり、その国土は分割さるべし」という清国亡国論の見解が見られる。

“唇齒輔車否定論”を言及したのは明治十五年(1882年)三月十一日に発表した『朝鮮の交際を論ず』である。

日本は他国に先立って朝鮮の開国に成功したものであるから、「今後朝鮮国が他の西洋諸国と条約を結ぶことあるも」、日本は同国に対する主導権を手放すべきではなく、まして西洋人の侵凌に対して日本は「亜細亜東方に於いて此首魁盟主」であらねばならない。しかし、「今支那なり、朝鮮なり、我日本の為によく其輔たり唇たるの実功を呈すべきや」、最悪の場合は両国共に西欧列強の手に落ちる恐れがあり、その場合には「西人東に迫るの勢は火の蔓延するが如し。隣家の焼亡豈恐れざる可けんや」。そしてそこから隣国に対する日本の干渉は、結局日本自国の防衛のためなりという大義名分が結論として得えられる論理構造になっている。

また一目瞭然、『唇齒輔車の古諺恃むに足らず』(明治十七年(1884年)九月四日)という論説は、題名から“唇齒輔車否定論”と同じ趣旨であることは容易に知られよう。

“隣国に蔽われる危憂論”として、明治十七年三月五日の『日本は支那の為に蔽はれざるを

期すべし』には「支那人が卑屈にして恥を知らざれば日本人の義侠もこれがために蔽われ、云々」と書かれている。日本が中国・韓国両国と同一視され、独立国家としての対面を傷つけられ、外交に不利を招くことを戒めている。

その他に、「兵論」、「東洋の政略果たして如何」(明治十五年十二月七日~十二月十二日)、「安南の風雨我日本に影響すること如何」(明治十六年六月九日)「沖繩想像論」(明治十六年八月十四日)等の論説からは、さらに「地大物博」な中国の潜在力への警戒心もまた潜んでいたと見てよいであろう。表面化した場合、例えば直接中国の軍事力への恐れという形をとってあらわれることもあろう。これは軍備拡張を進めるための主張と結びついている。この軍備拡張を進める主張の上にさらにもう一步、「割亜論」という主張があるのではないかと考えている。

ここで、この「割亜論」と呼びうる主張に関してもう少し工夫して論じる必要があると考える。再度『脱亜論』の結論部分を振り返ると、福沢は日本が「西洋の文明国」と共に中国朝鮮を「処分すべき」とであると論じている。まず、「処分」がキーワードで、これを明確にしなければならぬと思う。『新明解国語辞典』(第六版三省堂)によると、「処分」は以下の意味を持っている。

①余分(不要)なものとして始末すること。②規律・規則を破った者を罰すること。③[法律で]具体的事実や行為についての行政・司法権の発動として法律上の効果を發揮させる行為。

三つの中、明らかに①の意味として扱われている。もっと明白にするために、「始末」の意味も同じ辞書を使って調べてみよう。

①[こういうことからこういう結果になったという]全体の成行き。②あとでめんどろなことが起きないように物事の決まりをつけること。③むだの無いように使うこと。

其中に最も相応しい解釈は②にした。つまり、あとでめんどろなことが起きないように物事の決まりをつけることである。福沢が言う「処分」とは、「始末」の解釈をあわせて、分かりやすくいえば、中国・朝鮮を余分(不要)なものとして、あとでめんどろなことが起きないように決まりをつけようとすることに間違いない。そうだとすると、まだ曖昧なところが二点残っている。一つはめんどろなこと、一つは決まりである。次に、『脱亜論』原文⁶⁾に戻ってこの二点が何を指すかすぐ分かると思う。結論として言うと、「めんどろなこと」

6) 「されば今日の謀を為すに、我国は隣国の開明を待して共に亜細亜を興すの猶予有るべからず、寧ろ其伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、其支那朝鮮に接するの法も、隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に從て処分可べきのみ。」『脱亜論』

は日本が中国・朝鮮と同じようにみられること、「決まり」は西洋の仲間入りをして、中国・朝鮮を分割することを指しているのではないかと思う。言い換えれば、私の理解では、福沢は日本が中国・朝鮮を一視並みに見られて、西洋に従属させられないように、西洋国の仲間入りをして、同じように中国・朝鮮に対して分割しようと決断したのである。なぜならば、見られるように福沢が文明は麻疹の流行の如きで、東に蔓延し、この東漸にあたって、知者はその浸透を助けるべきであると既に文頭から論じているからである。当時の世界情勢は帝国主義時代とも言えると思う。ブルジョアジーについてマルクスとエンゲルが1848年に著した共産党宣言にはこう述べている。

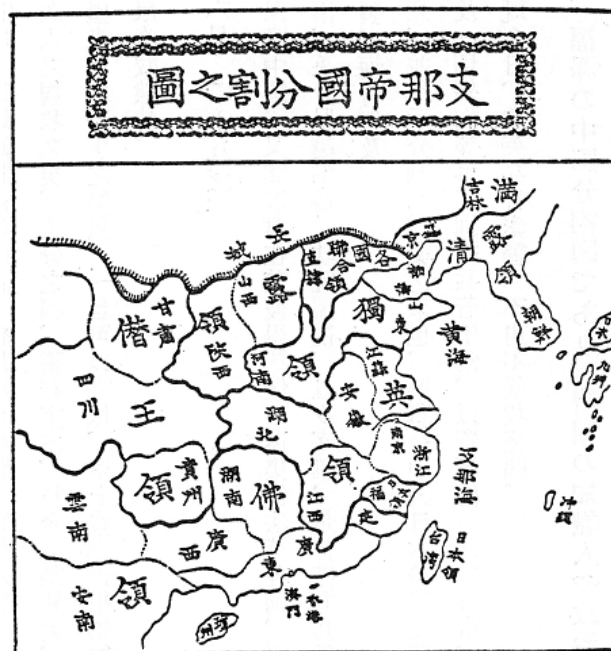
ブルジョアジーは、すべての生産用具の急速な改善によって、また無限に容易になった交通によって、あらゆる民族を、もつとも未開民族までも、文明にひき入れる。彼らの商品のおなじ安い価格は、中国の城壁をもことごとくうちくずし、未開人の頑固きわまる外国人ぎらいをも降伏させる重砲である。ブルジョアジーはすべての民族に、滅亡しなくてはならぬブルジョアジーの生産様式を採用するように強制する。彼らはすべての民族に、いわゆる文明を自国にとり入れること、すなわちブルジョアになることを、強制する。一言でいえば、ブルジョアジーは、自分の姿に似せて一つの世界をつくりだすのである。……ブルジョアジーは、……未開国と半開国とを文明国に、農業国民をブルジョア国民に、東洋を西洋に、従属させた。7)

この観点はある意味で福沢の文明東漸論に合致しているのではないか。また、福沢に言わせれば、前に認められた亡国論のように支那と朝鮮の国情については世界文明諸国の分割に帰するのは確実であった。一言でいうならば「西洋人が之に接するの風に從て処分す可きのみ」の真意こそ正にこの「割地論」と呼びうる主張ではないかと思われる。

実際にこの主張は壬午政変後の社説『外交論』(明治十六年十月)にすでに明瞭である。「我日本国は、その食む者の列に加わりて文明国人とともに良餌を求めんか……獵者となりて兎鹿を狩る云々」という見解が見られる。『東洋の波瀾』(明治十七年十月十六日)には、さらに、支那帝国分割案が、「支那帝国分割之図」に具現され、そこには既に日本領の台湾も描かれている8)。対外強硬の代表として福沢諭吉は戦争への道を先導し、戦争の遂行と勝利のために奮闘努力した。

7) マルクス＝エンゲル『共産党宣言』国民文庫1880年

8) <図1>



「東洋の波蘭」「十四年前の支那分割論」所収

<図1>

5. おわりに

以上、『脱亜論』をめぐって福沢諭吉の従来のアジア認識を考察してきた。福沢の主張を「脱亜論」「清国亡国論」「輔車唇齒否定論」「隣国に蔽われる危憂論」「割亜論」の五つとしてまとめた。また『脱亜論』において、「正に西洋人が之に接するの風に従て処分すべきのみ」と宣言して、福沢は九年後の日清戦争への道りを予告したのである。そして、その日清戦争の勝利を福沢は『福翁自伝』の最後でも「愉快とも有難いとも云ひやうがない」と喜びを表明、「実を申せば日清戦争何でもない。唯是れ日本の外交の序開き」に過ぎないと結んで、さらに後世の日露戦争、アジア太平洋戦争への日本の道りを示唆したのである。

『脱亜論』の日本での影響については、弓削達氏の言葉を借りれば、それは「日本の西欧化・近代化のためにアジアを邪魔者視し、アジア蔑視、日本の対アジア優越感をバネに、侵亜をもちとわぬ議論であった」が、その結果として「アジアを蔑視し、アジアを侵略し、

それを足場に日本の西洋化、近代化をなしとげようという意識は、明治以来国民教育の基礎理念となり、……1945年以前に教育をうけた世代で、此の意識に染まらなかった者は殆ど一人もいなかった筈である」(弓削達『明日への歴史学』)と言われる程までの影響力を持ったことであつた。

実は今日においても国民の一般的歴史認識と真相の間の乖離・歪みを度々実感できる。周知のように、中国・韓国と日本の国民の歴史認識の格差は深刻であり、その格差の出発点に基づいているものを課題にし検討を試みた。

以上ごく簡単ではあつたが、筆者が今回の考察で至った見解である。ただ今回の検討に於いて、やはり語学力と歴史認識の不足で、膨大な歴史資料、関連研究の中、ほんの一斑しか拝読・論及できなかった。問題点として、本稿では福沢諭吉のアジア蔑視論の形成した原因については言及しなかった。当時の国際情勢や福沢諭吉の中国関心などに関わっているのだろう。これから語学力と歴史認識の成長を目指して努力し、データ・文献・資料を増やして、研究を一步でも先に進めつづけたい。

【参考文献】

- 社会科学辞典編集委員会編(1992)『社会科学総合辞典』新日本出版社
 山田忠雄(2005)『新明解国語辞典』第六版、三省堂
 福沢諭吉(1958-1971)『福沢諭吉全集』岩波書店
 _____(1980)『福沢諭吉選集』岩波書店
 _____(1933)『続福沢全集<第2巻>』岩波書店
 杉田聡(2010)『福沢諭吉 朝鮮・中国・台湾論集』明石書店
 服部之総(1967)『服部之総著作集4』理論社
 _____(1967)『服部之総著作集6』理論社
 羽仁五郎(1979)『明治維新史研究』岩波書店
 マルクス=エンゲル(1880)『共産党宣言』国民文庫
 安川寿之輔(2006)『福沢諭吉の戦争論と天皇制論』高文研
 _____(2002)『福沢諭吉のアジア認識』高文研
 弓削達(1984)『明日への歴史学』河出書房新社
 家永三郎(1950)『福沢諭吉の階級意識』『近代精神とその限界』
 遠山茂樹(1970)『考察の視点』『福沢諭吉—思想と政治との関連—』東京大学出版会

논문투고일 : 2019년 01월 02일
 심사개시일 : 2019년 01월 17일
 1차 수정일 : 2019년 02월 10일
 2차 수정일 : 2019년 02월 14일
 게재확정일 : 2019년 02월 15일

 <要旨>

福沢諭吉のアジア認識

- 『脱亜論』を中心に -

李爽蓉・曹永湖

福沢諭吉は「有名な思想家・教育家」「日本近代文明の建造者」等等と理解されている。彼の膨大な著作の中、主要部分は、時事問題を扱っての発言である。したがって、本論文では、『脱亜論』を中心にその当時の政治状況・思想状況、それに対する彼の姿勢と関心の所在について考察してみたい。『脱亜論』は、日刊紙「時事新報」紙上に明治十八年(1885年)三月十六日に福沢諭吉が発表した社説である。この社説を中心に、当時明治維新という時代背景を明白にし、講座派の論説に沿って革命の後の日本は絶対主義国家とされる。福沢諭吉は明治政府の民間にいる代弁者として、『脱亜』を唱えた。また時事新報社説における1885年前後発表された一連のアジア論に基づき、福沢諭吉のアジア認識において、一貫する5つの主張を明らかにする。「脱亜論」・それから「清国亡国論」・日、中、朝間の「輔車唇齒否定論」・「隣国に敵われる危憂論」・「割亜論」が存在しているように思う。対外強硬の代表として福沢諭吉は戦争への道を先導し、戦争の遂行と勝利のために奮闘努力した。

Fukuzawa Yukichi's recognition of Asia

- Focusing on "Datsu-A Ron" -

Li, Shuang-Rong · Cho, Young-Ho

Abstract: Yukichi Fukuzawa is widely known because he is understood as the "famous educator" and "the builder of the modern Japanese civilization". In his extensive writings, the main part is a remark dealing with current affairs. Therefore, in this paper, I consider the political situation at that time, and his attitude and interest in which focusing on Datsu-a Ron. Datsu-a Ron refers to the editorial published by Yukichi Fukuzawa on March 16, 1885 in the daily newspaper Jiji shinpo. Centered on this editorial, the background of the Meiji Restoration at that time is clear, and Japan is defined as an absolute state after the Meiji Restoration. Since Meiji, it is not necessary to say that Japan's basic political, economic and diplomatic posture was a one-sided depart from Asia to Europe. It was in 1885 that Fukuzawa announced that he would grasp the basic posture of the Japanese with the exact word 'Datsu-a'(leaving Asia) and decide the direction to follow. In a sense, he may be the decision-maker of the national policy strategy in the Meiji period. Moreover, based on a series of Asian theories published around 1885 in the Jiji shinpo editorial, the five consistent opinions of Yukichi Fukuzawa were clarified. They are "leaving Asia", "the fall of the Qing Dynasty", "denial of dependence simultaneously" "danger triggered by the backwardness of neighboring countries" and "dividing Asia". Under this recognition of Asia, Yukichi Fukuzawa led the way to war and struggled to fight and win.